

神「特典内容は声優から  
選んでね」主人公「ええ  
... (困惑)」

The shield

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、大学生の高橋達也は友人との飲み会の後、トラックに引かれて命を落としてしまう。▼しかし、その死は神様のミスであり、達也は外見上では落ち着いていたが内心「ゆるるさん!!」とどこぞのブラックサンみたいにブチ切れていた。▼そこで神様にお詫びという形で転生をしないかと持ち掛けられ、これを承諾し、色々有りながらも転生をする▼原作知識が全くないままで転生した達也に待ち受ける出来事とは!!▼作者は初心者で豆腐メンタルです。色々と至らない点がありますが、何かあったら遠慮なく言って下さるとありがたいです。

# 目次

第0話	B e g i n s	N i g h t	
(という名の茶番劇)			
	設定・資料集	——	1
	原作前	こつちが本当のB e g i n s	11
N i g h t			
第1話	俺は生まれた時から何かやら		
	かすと決めていた気がする!!	——	19
第2話	何時までたっても変身すら出		
	来ないのは乾〇ってやつの仕事なんだ		
38			
第3話	祝・初・変・身	——	50



## 第0話 Begins Night(という名の茶番劇)

達也 side

川端康成の小説「雪国」にはこんな一節がある。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」と。そして、目の前の光景はそれを連想させるように真つ白だった。

「どっだ、ハハハ。」

などと考えていたら、突然目の前から全身真つ白な服を着た老人が出てきた、何故か土下座をしながらだが。そんな光景を目の当たりにして、どう反応すればいいのか困っていたが、老人が開口一番に

「この度は僕のミスで死なせてしまい本当にすまんかった。」

などと言ってきたので、詳しく聞いてみた所、

1. その日の神様は兎に角沢山の仕事をこなし、疲れてそのまま仕事場で寝てしま  
う。

2. その机には偶然にも俺に関する書類が置いてあり、あろうことかその紙を寝相を  
変えている間に破ってしまふ。

3. その紙によって俺達人間は存在証明がされており、そんな大事なものを破かれた  
俺は呆気なく死亡。

「詰まるところ、俺は神様にミスで死んだのか。」

「うむ、返す言葉も見つからん… すまぬ」

実のところ、死んだ直前の記憶が全くないので、教えてもらった所、

1. その日は大学のサークル仲間と一緒に居酒屋で飲みに行っていた。

2. 終電ぎりぎりまで飲み明かし、ルームシェアしている友達3人と一緒に帰宅する  
ことになった。

3. 帰宅途中に友達の一人が具合が悪くなったので、俺がコンビニに飲み物を買いに  
出たとたん、居眠り運転をしていたトラックに追突され即死。

という経緯らしい。……………おのれ、ゴルゴム!!ゆるさん!!(違うそうじゃない)と心の中で叫んでいると、突然神様が

「おぬしは、本来だとあり得ない事で死んでしまったので、ここまじやと、天国にも地獄にも行けぬ。よつておぬしには転生をしてもらおう事になるだろう」

「輪廻転生の転生か？」

「ここという転生というのは、好きなアニメやラノベの世界に行けることなのじゃよ」「へー」

「反応薄ツ!!大抵の奴は凄い喜ぶんだがなあ〜まあ、よい。さあ、お主が行きたい世界はなんじゃ!!」

「特に決まった世界とかなないから神様の方で決めてくれ」

「…えつ、ほ、本当に良いのか!!今なら何でもOKだというのに」「別に違う世界でもまたやっていけたらな、としか考えていないからな」

そんな俺自身、そんなアニメオタクというほど観てなかったし、そんな事よりも部活や勉強だったからな、まあそれにしつかりみたのは仮面ライダーシリーズぐらいだし

「お主がそう言うのならよい、転生先については儂の方で考えておくかの。おつと忘れるところじゃったわ。転生するにあたって特典というものが貰えるのだが…うむ…そのシステムがかなり特殊でな。好きなキャラクターの能力ではなくて声優が演じた



「それはいいが… 諏訪部順一って誰だ？」

そんな事を言った途端ガタンッ!!と神様がドリフターズみたいな感じでぶっ倒れて

「ほ、本当に知らないのか…有名じゃぞ」

「何かすみません」

コレばかりは俺の勉強不足だな。山寺宏一とか中川翔子なら分かるんだけど

「ほれ、これが彼が演じたキャラクター一覧じゃ」

スツと渡されたのは、諏訪部順一がアニメやゲームなどで担当したキャラクターがズラーツと記された紙だった。その中にはFateシリーズでお馴染みの英霊エミヤ、超次元バスケットでお馴染みの黒子のバスケの青峰大輝、他にも自衛隊（公式）が病気なGATEの伊丹耀司、キャラの濃さが異常なジョジョ3部のテレンス・T・ダービー（もしかしてオラオラですかあゝの人）etc… 要するに兎に角人気の声優さんである（乱暴）

「さあ、好きなのを3つ決めておくれ」

「とその前に、神様、俺ってどんな世界にいくのか決まった？」

「決まっておるぞ、おぬしが行く世界はインフィニット・ストラトスじゃ!!」

「どういう世界」「そいつは俺の出番だな」… 誰だよ」

うーん、帽子を被った金髪の… コイツはっ!!

「俺は、お節介役のスピードワゴン」

「あつ、ふーん（察し）」

解説王 スピードワゴン side

『舞台は近未来の日本、ここでは女性にしか反応しない世界最強の兵器「インフィニット・ストラトス」通称「IS」と呼ばれるものが存在し、その事が原因で世界の風潮は男尊女卑から女尊男卑へと移り変わっていた。そんな中、世紀末並みに鈍感な主人公の織斑一夏は高校受験のために会場に来た際に色々あつて「IS」を起動してしまう。彼は男なのにも関わらずだ。その後、一夏はISの操縦者を養成をする教育機関「IS学園」強制入学させられ、「世界初の男性操縦者」である彼に学園中の女子生徒は興味津々。様々な出会いや再会、そして、「IS」を巡る戦いに一夏は巻き込まれていく…。まあ、ざつくりと説明するとこんな感じだぜ』

流石は解説王だ、要点がしっかりとまとめられている。

「成る程、参考にする」

つまり、主人公がホモなんじゃないかって思うぐらい鈍感で、常に修羅場つてわけか（なぜそうなる）

少年思考中

「よし!!決まったぞ!!」

今回、選択した特典がこちら←

1. 青峰 大輝の容姿・身体能力
2. 黒のセイバー（ジークフリート）の能力・スキル
3. 仮面ライダークロノスの能力・アイテム（バグルドライバーII、ゲーマードライバー、マスター版ライダークロニクルガシャット×3）

「この3つで頼む」

「ああ問題ないぞ、ついでに今ならもう一つあげられるがどうするか」

「そうだな．．．それなら、俺の両親を幸せにしてくれないか。今まで、普段の生活や部活、予備校なんかで色々と迷惑かけて、でも突然死んで、自分の両親悲しませてだけだしな、結局、親孝行とか何一つしてやれなかったからさ。これは、俺の勝手な思い込みだったので押し付け過ぎないけれど、せめて、両親には幸せに暮らしてほしいんだ。」

「わかった、その願い必ず俺が果たそう」

「ありがとう、恩に着る」

これで、両親の事について安心だな。これで思い残すことは何も無い

「さてと、転生先も特典決めたところで、いよいよ転生の儀式を始めるとするか」

「おつ、いよいよだな。それで、これからどうするんだ？」

「そうじゃ…。だがしかしッ!! ただ、普通に転生するだけでは、面白くない!!」

いや、知らないし。後、普通が何なのかは知らないが、あいつがロクでもない事を考えているのはわかる

「さあ、見よ!!これが今回の転生装置じゃ!!」

突然、目が眩む程の光が発生し、目の前から現れてきたのは、赤い落とし穴にMONOMANEとかかれた電光掲示板、そして謎のスイッチ……えっ?

「……とん〇るず?」

「Exactly (その通りでございます)」

「」

「今回の転生の儀は、モノマネ芸をして面白かったら下の落とし穴が開いて、無事に転生出来るというわけじゃ」

「ちよつと何言ってるか分からないです」

「さあ〜楽しみじやの〜(ニヤニヤ)」

やるしか選択肢がないパターンですね、コレは…さて、何をするか…

少年思考中

「おつ、やるみたいじゃな」

「え、1977年8月2日に日本武道館で行われた格闘技世界一決定戦にて、ザ・モン  
スターマンにトドメをさす、アントニオ猪木」

「マジかww」

モノマネ中

「おいおいこいよお前オラツ!!」

と挑発し相手のハイキックを回避し、裏手に回って胴に抱きつき

「いゝいゝヨイショツ!!」

と角度をつけたパワーボムを、相手の背中を叩きつけ、そのまま

「おしゃッ!!」

と気合いを入れ、高く飛び上がり、相手の喉元目掛けてギロチンドロップを食らわせたその瞬間、足元の落とし穴が開いて落下、そして達也は無事転生するのであった……そして、神様は一言

「無音落下……これ即ち能の世界なり」

それはそれは、見事な無音落下だったという……

## 設定・資料集

オリ主紹介（原作開始時）

・名前 高橋 達也

・年齢 15歳（前世は23歳）

・容姿、姿、性格

青峰 大輝と同じ。身長192cm、体重85kgなどと身体的特徴はほとんど同じ、性格は、飄々としていながらも熱血漢などところがある。五反田 弾曰わく、基本ノリが良く誰とでも仲良くできるため友達が多い。前世は難関国立の大学に通っていたので、学業に関しては優秀の一言、また、身体能力に関しては化け物（特にバスケットには異次元）。一応、家事に関しては一通りこなすことができる（料理は良くも悪くもないらしい）。だが、一つ悪い所をあげるとすれば、唐変木かつ鈍感で、分かり易く言えばワンサマー2号。

・能力（身体的）

基本的な身体能力に関しては、青峰大輝に準ずる。特徴的な事に関しては下記に記す。

## 1) 型のないシュート

ストリートバスケットで鍛えた技術と得た経験による変幻自在なシュートフォーム。自身の持つ敏捷性とボールハンドリングを組み合わせる事で、常人に通じないプレーをする事が出来る（片手でもシュートを打つ事は可能であり、御手洗 数馬曰わく、「バスケットしろよ」の一言。

## 2) 野生

限界までに研ぎ澄まされた五感。これにより、相手のフェイクやシュートを完全に見切ることができ、また、相手の予測より遙かに速く反応することが出来る。ISでの戦闘では鈴の衝撃砲やセシリアのレーザーさえも見切る事が可能。

## 3) ZONE

トップアスリートでも偶発的にしか入れない、極限の集中状態。制限時間は短いものの、自身が持つ力を100%発揮する事ができ、驚異的な速度、跳躍力、情報処理能力を得ることが出来る。特に動体視力に関してはハイパーセンサーより上で、その訳としては、ZONE状態では生身を得た情報を脳で処理するのに対し、ハイパーセンサーは外部で得た情報をディスプレイの表示見る、または信号として確認する、処理するを必要とする為『確認をする』というタイムラグが発生するからだと思われる。

## 4) 竜殺しの大英雄

神様に特典の一つとしてもらった能力の一つ。発動条件は誰かを助ける事。英雄ジークフリートの持つ身体能力、戦闘技術、宝具などを再現することができる。また、ジークのように残りの寿命を代償とする必要はないが、変身後にはかなりの負担が体にかかる。ちなみに、制限時間は3分である。

↳ジークフリートに変身時の詳細↳

真名：ジークフリート

クラス：セイバー

ステータス

筋力：B+（ZONE時にはA+）

耐久：A（ZONE時にはA++）

敏捷：B（ZONE時にはA）

魔力：C（ZONE時にはB）

幸運：E

宝具

『幻想大剣・天魔失墜』

ランク：EX

種別：対軍宝具

レンジ：1～50人

最大捕捉：500人

Aランクに到達した『聖剣』と『魔剣』の二つの属性を持つ黄昏の剣。宝具発動時には柄に埋め込まれている青い宝玉の中の真エーテルを解放し、その剣気をビームとして放射する。溜め動作が短いので少なくとも、三回までの連発は可能。ZONE時には自身のステータスを一段階上昇させることができるが、ZONE解除後はステータスが二段階下がるという諸刃の剣。

『アーチャー・オブ・ファブニール悪竜の血鎧』

ランク：B+

種別：対人宝具

レンジ：—

防御対象：1人

悪竜の血を浴びることで得た常時発動型の宝具。Bランク以下の物理・エネルギー攻撃（衝撃砲、レーザー、シールドピアーズなど）を完全無効化し、Aランク以上（零落

白夜並み)でも掠り傷程度にしかならない、まさに鉄壁の防御力である。

『すまないさん』

ランク：不明

種別：対人宝具

レンジ：1人

最大射程：n人

すまない、本当にすまない。これは会話の途中に「すまない」が連呼されるというあくまでネタ宝具なので、何か勘違いをさせてしまったのなら、すまない。

オリジナルIS設定

機体名：Chronos

和名：クロノス

型式：CR-01

国家：日本国

分類：中近距離対応近接格闘型

装甲：N/A

装備：ガシヤコンバグヴァイザーII

ガシヤコンブレイカー

ガシヤコンソード

ガシヤコンマグナム

ガシヤコンスパロー

スペック：パンチ力5t（制限）

キック力9t（制限）

ジャンプ力25m（制限）

走力時速45km（制限）

仕様

1) Pause | Restart（制限有り）

時間そのものを無制限に『停止』ことができる。停止した世界ではクロノスしか活動する事が出来ず、また、停止した世界の物体にも干渉する事ができる。ただ、今のところ数秒しか止めることしかできない。一応、ワンオフアビリティ扱い

2) Long | Life | Guard

時間経過（1分ごと）で防御力が上昇し、シールドエネルギーSEが50回復する。

3) Savior | Fight | Glove / Shoes

攻撃を与える事で、パンチ力・キック力が10%上昇する。また、ガシヤコンウエポンの強化や攻撃システムの最適化などができ、その他、エア噴射によるアクロバティックな動きや自身の敏捷性アジリティを生かした変則的な攻撃が可能。

#### 4) Mech—Hundred—Guard

クロノスの腕部と脚部に装着されたガードパーツ。特殊な耐爆コーティングがなされているので100t以下の攻撃を安全に受け止める事が出来る。尚、零落白夜などのエネルギー無視攻撃なら干渉する事は可能だが、防御は出来ない。

#### 5) CR—Master—Arm/Leg

攻撃力と防御力を限界値まで高める機能『Gain—Over—Riser』が搭載されており、また、レスポンスも良いので、素早い攻撃を繰り返す事が可能。

#### 6) Chrono—Blade—Crown

クロノスの頭部にある索敵装置。一定範囲内の動体反応を認識、解析、補足する事ができ、相手のISの残存シールドエネルギーS Eも知ることができる。

#### 7) Chrono—Blade—Shoulder

クロノスの肩部を保護する装甲。停止した世界でも自由に動けるように、クロノスと周囲の空間を隔絶する事ができる。これの応用することで、AICが作り出した『停止結界』を突破する事が可能。

備考

束にも解析が全くできないという代物。ISの反応がある事以外わからず、分解しようにも謎の力が働いて出来ない、というのが今の現状。達也曰わく、自分を『神』と呼ぶヤベー奴から渡されたいらしい。

原作前 こつちが本当の Begins Night

第1話 俺は生まれた時から何かやらかすと決めていた  
気がする!!

達也 side

あつ、皆さんどうも、絶賛落下中の高橋 達也です。いや、案外早く転生すると思つたら、まだ着かないですね…。あれこれ30分近くは落ちてると思うんだが。こうやって落ち続けていると、高校の物理でやった力学の問題を思い出しますね、 $V \parallel V_0 + at$ とか $X \parallel V_0 + at$ とか。5at<sup>2</sup>とか。僕は力学より電磁気の方が好きですね、ただし、万有引力、お前は駄目だ。忘れるものか、あのテスト問題を。いきなり、何の脈絡もなく第一宇宙速度を求めよとか、なに考えてんだよT先生。あんなのテスト中に突然見せられたら頭の中真っ白になるわ。あく駄目だ、意味もなく落ち続けているからかな、まともに思考が出来てないですね。HHHHHHHA!! (すでに手遅れ)などとトチ狂っていると、

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン!!」

「(呼んで) ないです。」

「」

「その、何かごめん…… てか何時になつたら着くんだよ!!」

「あつ、それなら大丈夫じゃよ。たつた今、転生の調整を終えたからの、もう着くぞ」

「さいですか、それと世話かけたな、ありがとな神様」

「うむ、それでは第2の人生を楽しんくるんじやぞ」

「おう!!行ってくるぜ!!」

その瞬間、俺の体は光に吞まれ、

インフイニット・ストラトス  
I

S の世界に旅立つのであった。



あの時の転生から数年、俺は小学校に無事入学した。別にコレといったことはなく、それからというものの兎に角、勉強が簡単過ぎてつまらない。まあ、よくよく考えれば当たり前だな。転生する前まで大学4年生だからね、是非もないヨネ!!… 何考えてんだ俺。

それから時は流れていき、小学3年生のある日事件が起きた。あれはたしか放課後だったかな…

(よし、授業も終わったしきつきと帰りますかね。うん?)

家に帰ろうと廊下を歩いている途中、隣の教室を覗くとそこでは女子2人に対して男子3人であらかかっている場面に出くわした。

(あれは確か、篠ノ之だったけ、IS開発者の姉の。もう片方は誰だ? うーん、何か見覚えがあるんだが…)

篠ノ之を庇っている謎の女の子はもう泣きそうになっていて、ふとその子と目が合っってしまう。その目には助けを求めている。

(あんなになるまで彼女等をいじめるなんて… この達也容赦せん!!)

そして、俺は扉を蹴破るように入り、いじめていた男子達と対峙した。

「何女子いじめてんだよ、お前ら」

「はあ? 関係ない奴は黙ってろよ!!」

「同じ学校で同じ学年、それはお前も篠ノ之たち同じなはずだが、違うか？」

「うるせえ!!ぶつ飛ばすぞ!!」

「騒ぐな、鬱陶しい。そもそも、何でコイツらいじめてんだよ」

「だって篠ノ之つて奴、男女クセにリボン付けてんだぜ面白いに決まってるだろ」

それにあわせて周りの男子達も笑い始める、そのせいで篠ノ之達は更に泣きそうになる。

「それだけかよ、世紀末的にくだらな理由だな。どうせ篠ノ之が少し男らしいだけで、それが気に入らなかつただけだろ」

「っ…!!」

「はあく凶星かよ、男の嫉妬なんざ犬も食わねえよ」

「死ねえ!!」

それが癪に障ったのか急に殴りかかって来た。けど、なにも構えの取つてないパンチなんて大した威力にもならず

「軽いな、体重も乗つていなければ、芯もとらえられてない」

と、簡単に受け止め、そのまま逮捕術の要領で手首を固定しながら地面に抑えつけた。俗に言うオモプラッタである。

「は、離せおまツ、イテテテテ!!」

「動くなよ、そのまま大人しくしてくれれば、すぐに離す。後、篠ノ之。お前はそこに居る奴と一緒に先生を呼んでこい。これ以上面倒な事はしたくないから。」

「わ、分かった!!」

と急いで教室を出て行き、先生が来るまで待つのであった。



その後、男子達は「あいつがいきなり殴って来た」等々俺を貶めるような発言してきたが、実のところ教室の窓から野次馬がみていたので、その発言が嘘だという事が発覚。最終的にはいじめていた奴は1ヶ月の間教室内の掃除となった。それを聞いた俺は今度こそ帰ろうと思ったが、

「ち、ちよつと待つて!!」

篠ノ之の連れに呼び止められた。その後、篠ノ之も合流し帰路につこうとしたら

「あ、あのつ!! 今日はお助けして貰ってありがとうございます!! ほら、箒もやんなきゃ」

「その…だな…ありがとう、助かった」

「どう致しまして、それと平気か？手出されない？」

「うん、大丈夫。私も箒も怪我してないから」

「そっか：。それじゃ俺の家こっちだから。そんじゃ」

「その前にせめてお名前聞かせてくれる？その、お礼もしたいし、何より助けてくれた恩人だから」

「ああ、それなら俺の名前は高橋 達也だ。そっちは」

「私の名前は織斑 一夏そして：。」

「私の事ははすで知っているとと思うが篠ノ之 箒だ、よろしく」

と二人は微笑みながら挨拶をしていたのだが、それよりも

（げ、原作主人公がTS!! ま、マズいですよ、神様。てか、何やってんだあああああいつはああああ）

「その、どうかしたの？顔色が悪いけど」

「い、いやっ!! 平気平気、気にしないで。それじゃあね、バイバイ!!」

もう色々々と混乱しっぱなしで、気持ちを落ち着けるためアクセルフォームのごとく俺は駆け出した（間違った対処法）

「さ、さようなら：。」

「どうかしたのか、アイツは」

「や、やあ？」



それはというもののこの二人とはすぐに仲良くなり、その姉達とも仲良くなり、初めて会った時なんてそれはもう凄かったよ、本当に。一夏の姉である千冬には「友達なつてくれて、ありがとう。」と泣きつかれ、一緒にご飯を食べ、そしてまさかの一緒にお風呂入る事に、流石に風呂は不味いと思つて、拒否しようしたが、一夏の泣き顔＋上目遣いには勝てず、そのまま入った。えつ、その時はどうだったか？何故か記憶が無いのだよ（遠い目）

また、篠ノ之の姉である束には、「あのツンツンしてる箒ちゃんに新しい友達が…これは結婚案件ですな」と言われ、それを聞いた箒は竹刀で実の姉を思いつきり殴っていた。いやゝ人の頭つてあんな音するんだ。そして、一緒におふ（以下略）。そして、翌朝になつてからだが、束さんが「昨日は変な事言つてごめんなさい」誤つて来た。あれマジだったのか…

それと、一時的な措置として織斑姉妹を家に迎え入れました。訳としては、とある家庭事情で千冬さんは一夏を養う為に、中学生でありながら女手1つバイトをしていて、いつも疲れて帰ってくるということを一夏から聞き、その事を両親に伝えた所「ウチにきなさい。」とのこと。これに千冬さんは最初断ろうとしたが、母親が1時間の末に説得に成功。その話の最中「何か私達に出来ることがないか」ということで、親父は船の機関士、母親は有名ファッションデザイナーという仕事柄、家を空ける事がかなり多いので、いない代わりに家事をするという形で引き受けることとなった。まあ、色々あったとはいえ、一件落着かな。



織斑姉妹との生活も1ヶ月経ち、だいぶ慣れてきた。やっぱり、姉妹の作る料理は最っ高やなと感じていると千冬さんが

「達也、剣道に興味ないか？」

「け、剣道？」

「そうだ、実は箒の家に道場があつて、私と一夏、箒も一緒にやっつけてだな、その二人から誘われているんだが」

「そうだな……バスケの練習もあるから、ちよつと考えさせてもらつてもいいか？」

「ああ、返事は直ぐじゃなくてもいいが出来るだけ早くしてほしい」

「ああ、分かった」

とは言ったものの、剣道か。まあ、確かに前世では小学生の時だけ元警察官だった祖父に剣道を勧められてやってたから、一応経験はあるけども、うーん、どうしようか。でも、折角あの二人が誘つてきてくれたんだから、行くだけ行つてみて後は流れで決めますか!!

「……というわけで、俺は今、篠ノ之神社の敷地内にある道場に来てます!!」

「達也、それ誰に話してるの？」

「気にしたら負けだからな」

「……」

一夏に白けた目で見られたりしていると奥から外見は40代前半なのだろうか長身の男がやってきて、

「君が千冬が言っていた達也君だね」

「はい、高橋 達也です。よろしくお願いします」

（やばいオーラからしてOTONAだ!!絶対OTONAだ!!）

「よろしい、そういえば自己紹介がまだだったね。私の名前は篠ノ之 柳韻だ、よろしく。さあ、早速で悪いがこの胴着に着替えてくれないか」

「は、はい、分かりました」

と渡された胴着を身に付け待っていると

「あつ、達也!! 来てくれたのだな」

「箒つたらね、達也が来るのずーっと待ってたんだよ」

「いつ、一夏／＼／それを言うなどあれほど／＼／」

「あはは、ごめんごめん」

そうじゃれ合っているうちに練習が始まり、準備体操の後は素振り、足さばき、切り返し、追い込み、実践練習 e t c . : こうして2時間かけて剣道の見学会が終わった。いや／＼久々にやると疲れるなあ／＼バスケットとは全く別の競技だけど、楽しかったな。これなら続けられるかもな

「どうだったかな、初めて剣道をやった感想は」

「そうだな、俺はバスケットしかやった事ないから、他のスポーツをやるなんて考えたことなかったけど、でも、生まれて初めてバスケット以外にやってみたいと思った」

「そうか、それは良かったね」

「だから… 柳韻師範!! 俺、やります!! バスケと一緒に剣道をやりたいです!!」

「分かった、達也君。君をこの道場の門下生として迎え入れよう」

「はい!! ありがとうございます!!」

「これで今日から同門だね、私達」

「入門したからには厳しくしていくからな、肝に命じておくように」

「はいっ!!」



あの日から俺は道場に通い始めるようになった。そして、入門してからはというものの、ある問題が発生したそれは…

「そこは、ズバツとドオーン!! という感じだ」

「… ネロ?」

「いやいや、それじゃ伝わってないから… 達也そこはね…」

「待て、今は私が教えているのだ」

「だから、擬音だけじゃ伝わらないってば」

「そ、そうか？」

(「自覚ないのかよ…」)

「取り敢えず、柳韻さんに聞いてくるよ」

「そうだね、それが良いと思うよ」

「うう… 私の教えが悪いのか」

すまん、それは流石にフォローできん。

「「ありがとうございます!!」」

今日の練習も終了し、いつもの3人で帰ろうとした所、束さんが突然現れ、見せたいものがあるということらしい。まさか…

「じゃーん!!これが束さんが数年かけて開発・設計したマルチフォーム・スーツ、  
インフィニット・ストラトス

I S だよ♪」

「す、すげえ… カッコイイ!!」

「なにこれ… 大きい」

「これが… I S」

「うんうん♪ 良い反応だね、頑張って作ったかいがあつたよ♪」

そこにあつたのは、中世の騎士の鎧でありながらも、どこか現代的なイメージがあるフォルムをしているパワードスーツ。篠ノ之 東が弱冠14で完成させたというのだから凄い。まるで..

「アーロード○アみたいだ」

「違うからね!? 別に○○マ粒子とか使っていないからね!?」

「ミ○フスキー○子?」

「違うよ!! えくゴホンツ! !まずはISとは何なのかについてだね♪ISとは」

(キングクリムゾンツ!! ISについて解説した時間は消し飛び!! 解説を終えたという結果だけが残るっ!!)

「: : : という感じだね、分かんない所ないかな?」

「は〜い、これって誰でも乗れるの?」

と一夏が質問すると、一瞬ギクツ!! っでなった東さん。流石は千冬妹だ、きつとニュータイプだ。

「: : : うん。ISは女性にしか反応しない事かな」

「「えつ、ええええええ!!」」

「だって仕方ないじゃん!! そうなるように設定したんだから!!」

「「ぎゃ、逆ギレされた…」」

本人曰わく、ロボット×男はオーソドックス過ぎる為らしい。確かに、ガ○ダムはじめとする、マ○ンガー○、ボ○ムズ、マク○ス等々数え切れないほどあるわけだ。まあ、実際の所は違う理由があるみたいに感じるし例えば、女性の地位を向上させる為とか  
な。

「つまり、これは女性にしか扱えず、また、現行の航空機を凌駕する起動性能を持っている、しかも、まだまだ発展途上ってわけか。こんなの世界に公表したら、大混乱に陥るだろうな。最悪の場合、『軍事兵器』として採用されて、あちこちで『戦争』が発生するかもしれない」

「...」

俺がそんな事を言うのと一夏と筈は押し黙ってしまおうが

「させない、絶対させないよ!! だって私の作ったI Sは戦争をする為に作ったんじゃない!! 自由に宇宙そらを駆ける為の翼なんだから!!」

そう東さんは言い切った。

「それが東さんがI Sを作った理由…… 良いと思うぜ、俺は。だって、簡単に宇宙に

行けるんだろ、凄いいことじゃん。人類はまだ宇宙の構造の約5%しか解明出来てなくて、もしかしたら、地球以外にも生命体が存在する星があるかもしれないし、実は宇宙が他にも存在するかもしれない。そんな仮説に過ぎないことを証明するためにISがあると思う。まあ、あくまでも俺の勝手な想像だけだよ」

思っている事は全て言った。確かに、口では綺麗な事なんてはいくらでも言えるし、絶対に軍事利用されることはないとは言いきれない。特にダイナマイトがいい例だろう。本来は採石の為に開発されたのに、結局、軍事兵器としての用途を見いだされ、発明者のアルフレッド・ノーベルは『死の商人』とまで言われるようになってしまった。転生する前に聞いた話だと、東さんは『白騎士事件』を起こし、軍事利用としてのアピールをしてしまう。それは何としても防がねければならない。だって、ISは人殺しの兵器ではないのだから。

「すごいね…。 たつくんは、東さん感心しちゃった」

「そうかな…。 ただ俺は分からないこと知りたいと思ってるだけだよ、こんな考え持つ人は俺以外にもいるかもしれないし…。」

「そうだ、俺の考えなんて所詮は綺麗事だ。俺より真つ当な考えを持つやつ何て幾らでもある」

「ううん、確かにたつくん以外にいると思う。でも、こうやって小さな時から考えている

子は中々いないよ。それは十分誇っていいと思うよ」

「お、おう」

やべえ、今、絶対変な顔してぞ俺。しかも、あんな事言ったなんて恥ずかし過ぎる／＼何が「良いと思うぜ」だよ!!そして、追い討ちをかけるように

「達也つてそんな事考えていたんだ」

「いつも、ぼけーつとしてるのにな」

「… うっせ」

「あはは、照れてる〜」

「ふふ… 顔真っ赤になってるな」

「勘弁してくれ…」

美人な幼馴染み2人の攻撃により、俺のライフポイントは0に。恥ずかしさの余り顔を抑えて悶えていると

「… たつくん、その… ありがとね。東さん、色々と迷ってたんだ。これを発表したらどうなるのかとか、人殺しの兵器にされちゃうのだった。でもね、決めたよ。ISの持つ力で、皆が平和で仲良く自由に暮らせるような世界を目指して頑張るから… その、応援してくれる?」

「当たり前だ、全力でサポートするぜ!!」

「わ、私も応援します!! まだI Sの事を何も知らないけれど、東さんの力になりたいです!!」

「私は、姉さんを助けたいです。何時も助けられているだけじゃいやだから、今度は私が助ける番です!!」

「みんな… 本当にありがとう」

と涙を流しながら東さんは俺たちお礼を言った。

(やっぱ、女の子の笑顔は何にでも変えられないな。だが、俺のやっている事は原作を改変してるといふ事。それでも、あんな覚悟見せられたらやるしかないだろう)

「暗くなってきたから、そろそろ帰るとするか」

「そうだね、帰ろうか達也」

「ああ、それじゃあ、さようなら」

「明日、学校でね」

そう告げると、俺と一夏は篠ノ之神社を後にし、それぞれの家路についた。



くその夜く

「もしもし、ちーちゃん」

「どうしたんだ、東。こんな遅くに電話とは」

「大事な話があるから、聞いてくれる？」

「構わない、続けてくれ」

「今日、たつくん達に I S の事を話したんだ」

「そうか・・・それでどうだった」

「反応は良かったけど、たつくんに軍事利用について聞かれたんだ」

「中々鋭いな・・・本当に小学生なのか、アイツは」

「そうだね・・・まあ、その時自分でも信じられなかったけど、軍事兵器にはさせないって言ったんだ・・・最近まで I S を軍事兵器としてアピールする白騎士計画について話し合ってたのにね」

「それはそうだとしても、計画は進めるのか？」

「・・・やめるよ。こんな事言うのは都合が良いのは分かっている。でも、I S を兵器にさせない事は自分の本心なんだと思う」

「そうか・・・お前がそう思ってるだから、それが正しいさ」

「ありがと、ちーちゃん。それとごめんね、色々迷惑かけて…」

「なに構わないさ、そんな事はいつも事だ」

「そっか、エヘヘ♪ それじゃあ、この話はまた明日にしようか。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

と電話は切れた時の千冬の顔は、疲れていてその中にも安堵の表情を浮かべていた。そのままベッドに入り

（達也には感謝しなければな… 私だけでは束を止める事ができなかつたろう）

意識が落ちる最中、微笑みながら

「ありがと… 達也」

と呟き、すやすやと寝始めたのだった

## 第2話 何時までたっても変身すら出来ないのは乾〇ってやつ<sup>の</sup>仕業なんだ



あの日から約1ヶ月後、束さんは日本のとある研究所（のち倉持技研）でインフイニット・ストラトス

I S を世界に向け発表した。I S の特徴は何と言っても、どんな環境でも自由自在に移動・作業出来るという点だ。例えとしては少々乱暴になるかもしれないが、わざわざ多くの時間とお金をかけて宇宙船や探査機などを開発するよりも宇宙空間での利用を想定して設計されたI S ならば、I S を纏った状態で地球と宇宙空間を行き来出来るので、安全性も宇宙船に比べ格段に上昇し、また、国際宇宙ステーションI S S に物資を届けるのに一々ロケットを飛ばす必要も無くなるのである。まあ、あくまでI S の優位性を象徴する為の架空の話ではあるが…

一方、世間の反応は様々で、高校生でこれが開発したのはまさしく稀代の天才だ!!とか、これをもし仮に利用出来れば宇宙開発も大きく進展するのではないかな等など科学者

たちからは肯定的な意見も多かった。しかし、一部軍関係者たちからは『兵器』として転用し核に変わる新たな抑止力にするべきなど、色々言われてはいた。まあ、正直な話そんなの事は俺や東も予想出来たので、I Sの公式発表の1週間前に日本、アメリカ、ロシアの3ヶ国に予め発表し、『兵器』として開発・採用しないことを約束出来るのであれば、他の国より『優先的』にコアやI Sに関する技術を提供すると言ったところすぐに了承を得られたので、上記の問題についてこの国の御三方が『お前ら兵器転用したら分かつてるよな』と野獣の眼光並みの睨みを効かせてくれたところ、特にアメリカとの関係が少し微妙な関係にあるはずのロシアが賛同してくれたおかげもあってかすぐに沈静化した。

また、I S以外にもI Sの技術を応用した様々な技術や製品も発表した。具体例を上げると、I Sのパワーアシスト機能であるP I Cを応用した災害用パワードスーツや惑星間通信を可能とするコア・インターネット技術を応用した、5 Gを超えた新たな高速通信など様々だ。

というふうに世界は変わってしまった、I Sという存在によって。本来、人類が100年掛けて出来るかもしれない事を、篠ノ之東という天才は僅か1日で成してしまつたと、世間の人々は彼女を称賛した。まあ、あまり東さんは喜んではいなかったもので、凄いい褒めてあげたら顔を真っ赤にして「あ、ありがと……／＼」と俯きながら呟いていた。

可愛いかよ。

▼

ISの発表から1年後、俺たちは小学4年生となった。IS開発者のご家族である篠ノ之家は本来、「重要人保護プログラム」によって転校させられるはずだったが、当の開発者である篠ノ之東が「箒ちゃんたちと離れるなんてやだあああー!!」とシスコンを発症し揉めに揉めた結果、篠ノ之家を警察が護衛するという形で落ち着いた。

さらに、1年後には新しく友達が出来た。名前は「凰 鈴音」って奴だ。鈴は中国から転校生で、最初は上手く日本語が喋られず友達も出来てなかった。それをからかってくる男子共がいたので、「人間の屑がこの野郎・・・(AKYS)」てな感じでボコボコにするのは堪え(前回から学習)、あらかじめ先生を連れて行った。そして、いじめの瞬間を先生に見られた男子達は校長室へドナドナされていった。ざまあみろwww(草加スマイル)その後、先生に事情を説明して帰宅しようとしたら、鈴がどうしてもお礼がしたいと言うことで、鈴の両親が経営している中華料理店に向かい、両親共々色ご馳走してもらった。うん、おいしい!(ナイナイ岡村兄貴)家に帰る際、鈴から友達になってくれないか言われたので、よろしくな!!と言った。そしたら太陽のような笑顔を顔に浮

かべて喜んでくれて、凄く嬉しかった。ホントあの時の笑顔はヤバかった（語彙力）

鈴と友達なった後、一夏や箒とも仲良くなり、放課後や休日でもよく遊ぶようになった。暫くすると鈴も日本語もだいぶ上達したお陰もあつてか、本来の活発かつサバサバした性格で次々と友達を作り、あつという間にクラスの人気者になっていった。いやしくよかつたよかつた。



あたしの名前は風鈴音。中国出身で、4月から日本にやっていたの。最初の頃は日本語上手く話せなくて、友達も一人もいなかった。そのせいか、あたしはクラスのある男子達よく虐められてたわ。初めは変な日本語だからかわれただけだった、でもこれはあたしが上手く話せないのがいけない、だからこれは自分が悪いんだって自分に言い聞かせて何も言い返さなかった。でも、そんな反応が面白く無かつたのか、どんどんエスカレートして、物を隠されたり落書きされるようになった。先生に相談した方が良かったのかもしれないけど、両親に迷惑掛けたくないと思つたあたしは相談することなく静かに耐えていたわ。あの日まで……

放課後、あたしは憂鬱だった。何故なら今日の掃除当番にはいつも虐めてくる男子達

がいたからだ。すると案の定男子達はあたしの事をからかってきた

「なあ、お前中国出身なんだろ。だったらパンダの真似してみろよw」

「で、出来ないわよ…」

「じゃあさ、笹食ってる真似でいいんじゃないやねw」

「それいいなw」

「じゃあ、オレたち嵐を取り押さえているからそこにある葉っぱは食わせようぜ」

すると、グループの2人があたしを羽交い締めにして、もう1人が教室内にある観葉

植物の葉っぱを食わせようしてきた

「そ、そんなの食べられないじゃない!!」

「おい、暴れんなよ!!」

「さっさと食わせようぜw」

もうだめ…とそう思った時、奥から教室の扉が開く音がした

「おい、何してんだよ」

「なんだよ達也、今いい所なんだから邪魔すんなよ」

「何がいい所だよ、完全にいじめじゃねえか。お前から次やつたら両親に連絡する言われただろ、あれ一夏達へのいじめの件（前話参照）から反省してねえのかよ」

間一髪の所であたしを助けてくれたのは、小学五年生にしてはかなり背が高くて、少

し日焼けしている男子の高橋達也だった。

「ははは、そんなのバレなきや良いんだよw」

「そう言ってますけど、先生」

「はは。」

「お前らちよつと来てもらおうか」

「前みたいに俺が殴るとでも思ったか、そんな事してただでさえ低い俺のイメージが下がったら大変だからな、だから今回はスマートに解決させてもらったよ。ちなみに、今回は再犯という形なるから、もしかしたら校長先生も交えて親と面談になるかもなw」

「達也てめえ!!」

「Good Luck!!」

「さつさと来い!!」

「離せよ!!クソ教師がアアア!!」

「...」

鈴を虐めていた男子達は、地下行きの屑共よろしく先生に腕を掴まれたまま校長室へと連れてかれて行った。ざまあみろんでんだ。でも、まずは鈴の安全を確認しないと

「大丈夫だったか?怪我とかない?」

「うん… 平気」

「そっか、取り敢えず事情話さなきゃいけないから職員室行こうぜ」

「うん…」

その後、今回虐めてた奴らは前と同じく全く反省もしてなかったもので、流石の校長先生でも堪忍袋の緒が切れたのか修羅の如くブチ切れて、挙句の果てには虐めてた男子達を親共々別の地域に転校させてしまった。いやゝ怖かった。突然、窓ガラスが震えたと思つたら、校長先生の怒号が職員室に響き渡つたからな、なるほどあれがスー〇ーサイヤ人つて奴ですか。そんなこんだで説明を終えた俺と鈴は一緒に帰る事になった。

「今日は… ありがと」

「気にしなくていいよ、ただ俺があういう事をする奴らが気に食わないだけだ」

「それでも嬉しかったの、こうやって守つてくれる人がいなかったから、だから、ありがとうね」ニコ

「そ、そっか。それは良かったな、あはは」

今笑顔はアカンですわ。藤川球児の火の玉ストレート並に威力があったわ

「そ、それでね。今回の件で色々迷惑かけたじゃない、だからそのお礼がしたいの」「お礼なんて、別に俺は見返りが欲しくてやったわけじゃないしそれに…」

「…だめ？（上目遣い）」

ズキユウウウウン／＼

「わ、わかった。それでどんなお礼なんだ」

「あたしの両親が中華料理店やつてるんだ。だから料理をご馳走したいと思つて…」

「取り敢えず親に連絡しないと分からないから」

「あたし待つてるから」

「お、おう」

なるほど、これは行かないとマズイパターンですね…

その後、両親にいじめの件と鈴の事も伝えたところ是非お会いしたいという事で鈴の両親が経営している中華料理店に行くこととなった。店は家から比較的近くに立地し、駅も近いこともあつて本来なら多くの客がいるはずなのだが、何故か俺達のために貸切となつていた。大丈夫なのかな売り上げとか…

「この度はうちの娘を助けていただきありがとうございます」

「い、いえ、身体が勝手に動いたものですから…娘さんに怪我がなくて良かったです」

「そんな畏まった事言つてゝ本当は自分から動いたくせに」

「母さん!!」

「そうだな、前にも一度こんな事があったからなあ。流石、我が息子だ!!」

「と、父さんまで!!」

「カ、カツコよかったわよ、達也!!／／／」

「：． ツ!!／／／ カオマツカ

「ウフフフフ」

「ハハハハハ」

「く、殺せ!!」

鈴だけならまだしもその両親にまで笑われるなんて、ああ穴があつたら入りたい：．

その後、料理を沢山ご馳走になった俺達は家に帰る支度をしていたすると

「ねえ、達也：． ちよつと話聞いてくれる?」

「いいぜ、なんだよ」

「えつとね：． そのくあ、あたしとと、友達になってくれる?」

「何だそんなことか、こちらこそよろしくな」

「い、いいの!!あたし日本語上手く話せないのに：．：」

「いいも何も何で友達になるのにそんなに謙る必要あるんだよ。クラスの大半はお前と友達になりたいって言ってるんだぜ。だからそんな事気にするな。」

「… ホントに」

「本当だって、それに日本語なんてこれから練習していけば良いんだよ、友達と話して遊んで勉強していけば、すぐに出来るようになるさ」

「うん、頑張る!!」

「おう、頑張れよ」

その時の鈴の笑顔は忘れられない位可愛かった…



「ねえ貴方、もしかしたら達也の事が好きな人が増えたかもね」

「確定だろうな、しかし、大変になるかもしれないなあのだらシ息子ことだ、他にも好きな人は沢山出来てしまうだろう…」

「大丈夫よ、私達の息子だもの。きっと幸せに出来るはずよ♪」

「いや、俺が心配してるのはそういう事でなくてだな…」



「はっ!!達也に女ができた気がする」

「何言ってるんだ一夏…」

「むっ!!達也に女の影が」

「えっ!!箒ちゃんも感じたの?」

「ライバルか望む所だ!!」

「うん、頑張ろうね!!」

ただ忘れてはならないイレギュラーがいるということとは

それ相応のイレギュラーも発生する事を…

T  
o  
  
B  
e  
  
C  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 第3話 祝・初・変・身



鈴と友達になって三ヶ月がたつた。あの日から鈴は前のような口数の少なく静かな奴というイメージから打って変わって非常に明るくて明朗快活な奴とクラスのみんなに親しまれるようになった。いや／＼よかったよかった、笑顔も前と比べて格段に増えたしこれなら心配する必要もないな。後、一夏や箒とも一緒に遊ぶようになって、最近俺も含めみんなでラウンドンに行って、野球のバッティングが体験できるゾーンでは、俺が楽○のブ○ツシユ選手のように構えて打とうとして腰を痛めたのはいい思い出だ……

そんなこんなで日はどんどん進んでいき気づけば夏休みに突入していた。宿題なんか日記以外はすべて第1週目で終わらせ家でゴロゴロしていた。それなら誰かと遊びに行けばいいじゃんと思うかもしれないが、一夏と千冬さんは駅前シヨッピングモールで買い物、箒は実家の神社の手伝い、鈴はお店のお手伝いと皆と予定が重なるという

何とも運が悪い状況に見舞われたのだった。なので、仕方なく近くのゲーセンでも寄ろうかと思ひ玄関を出ると、ポスト中に知らない差出人が書かれた手紙が俺の元に届いていた。何なんだろうと思ひ裏を見てみるとそこには……

親愛なる達也へ

達也よ、元気にしておるか

これを見ているということは、大体暇すぎて家の中でゴロゴロしておることだろう

ばれてるし……てかこれ書いてるアンタも暇だろ

そんな暇を持って余しているおぬしにワシがある物をプレゼントしてやろう

まあ、プレゼントと言つても普通の物ではないがの……フオフオフオ

ロクでもない物なら返品してやるか、というか天界にどうやって返品するんだ…

ちなみにここに書いてある場所で受け取ってもらうぞ、後、返品は不可じゃ

えーと消費者センターって188だっけ…

ついでに期限は後30分じゃ

「は？」

早く行かなと大変なこ「？気に読んでる場合じゃねえ!!」

俺は弾かれたように家を飛び出した。あの神が指定した場所はここから歩いて30分位のところにある山の中にある神社だ。兎に角、急がないとあの感じだと相当な物に違いないはず…そう考えながら俺はメロスのように走り続けた。



「気を取り直して、君だねクロノスの力を受け取りに来たのは」

「やはりそういうことか（OMO）」

なんとなく予想はついていたがまさか檀黎斗から受け取ることになるとは…

「実は君のことは前から見させてもらった。そして感じたのさ、君の心の奥底に眠る揺るぎない覚悟というものを」

「覚悟だなんて… そんな大層なもの俺は…」

「あるさ、君ならね。誰か守るため、そして誰かを守る… そんな覚悟が」

「……」

「まあ、唐突にそんなこと言われても戸惑うのが当然だろうな。少しの間、私の話を聞いてくれないだろうか」

「ああ」

「私は君が知っている通りロクでもない人間だった。自らの才能に絶対的な自信を持ち、そのくせ自分より優れた才能を持つものが現れると潰さずにはいられないほど強烈な自尊心やプライドを持つ、そんな人間だった。そして、挙句の果てには、他者を自分の目的達成のための「道具」としか見ず、人やバグスターの命を弄んできた。だが、九条貴利矢や宝生永夢との戦いを経て私は命というものがどれ程大切なのか知ることが出来た」

「昔の私は、何故人間は決まった寿命でしか生きられないのか。不老不死になれば苦しまず生きることが出来るのではないか。その常人からかけ離れた命の価値観からか、私は新しい人体の理を超えた永遠の命を持つ生命体を作り上げようとしてきた。」

「でも、それは大きな間違いだった。大事なのは、一つしか無い命を大切にすること。そのためにも最善を尽くすこと」

「その最善を尽くす為に彼らは戦い続けてきた。仮面ライダーとして、そして一人の医者として」

「私は死ぬ間際でやっと理解できた。だが、私は…遅すぎたのだ…」

「何か言葉を返すべきだったのだろう、しかし、俺は何も答えることは出来なかった。すると檀黎斗の体が少し透けていた。

「もう時間か？ すまないが今の私には時間があまり残されていないのでね、押しつけになってしまいが私からの頼みを聞いてくれないだろうか？」

「頼み…？」

「予定通りクロノスの力は君に渡そう、そしてここからが本題だ。君にコレを渡そうと思おう」

「…ッ!!これって!!」

そうやって俺に手渡してきたのはプロトガツシャット一式と見慣れないガツシャット一つが入ったカバンだった。

「これから君には大きな試練や困難が待ち受けるかもしれない。だが、これがあればそれを乗り越えられる手助けになるはずだ。そして、その力を使ってどうか皆を守つてくれ。」

「俺にそんなことできるのか……」

「出来るとも。女の子をいじめから守つた勇氣ある君ならね」

俺は前世があるとはいえ今はただの小学5年生……でもここまで言われたらなあ

「……わかった。やるよ、俺」

やらなきや男が廃るってもんだ!!

「ありがとう……これで……私の願いは果たされた」

そういうと檀黎斗の体はさつきより透けていき

「まあ、精々頑張るがいい!! ヴェエハハハハハハハハハハ!!」

最後は檀黎斗らしい台詞を叫びながら消えていった。



「——まるで嵐のような人だったな」

改めて、檀黎斗という人物に対する認識が変わった一日だった。あの感じだとすっかり改心してる感じだったな。まああれだけ永夢達にやられればそりやあなるか。まるで綺麗になったジャ○アンみたいだ。

「帰ろうと思ったけどまだ帰るには時間あるし、試しに変身でもしてみるか」

幸いなことに指定された場所は町から離れた山の中だったので、これなら誰にもばれないだろうと思ひ、俺は早速変身する準備に取り掛かった。

「えーとまずは…バグスターバツクルを腰に装着してっ」と

バツクルを押し当てると自動的にベルトが腰に装着された。地味だけど凄い機能だよな…コレ

「次にバグルドライバーIIをバツクルにセットするらしいけど、本当にセットして大丈夫かな…確かバグスターウイルスに適合してないと感染した後には消滅するんだよな…」

何となく心配になってきたが、やってみないことには分からないので、意を決した俺はバグルドライバーIIをセットした。

ガツチャーン！

特に何の痛みや痺れもなくセツトすることが出来た。後からわかった話だが、どうも俺はバグスターウイルスの他にゲムデウスウイルスなどにも完全適合してらしい、その気になればゲムデウスクロノスにも変身可能だとか

「いよいよお待ちかねの変身だな..」

ついに変身する事になったが

「初変身だから普通に変身するだけじゃつまらないし.. あれやるか」

そう思った俺はあのシーンの再現を始めたのだ..

く達也の脳内く

「幻夢コーポレーションを作ったのは私だ！ 黎斗でも、ましてや天ヶ崎恋でもない」

「私こそが社長.....」

ガッチャーン!!

「今こそ審判の時……」

仮面ライダークロニクル!!

ガシヤットを放り投げつつ右手でボタンを押し待機音が鳴り響く中、投げたガシヤットがバグルドライバーIIに挿入されたのを確認すると

「変……身」

と眩きながらバグルアップトリガーを押し込んだ。

バグルアップ!!

天を掴めライダー!!

刻めクロニクル!!

今こそ時は極まれりイイイイ!!

そして俺は……仮面ライダークロノスになった。



「……はッ!!!俺は一体なにをして……」

どうも俺は感激のあまり体が勝手にインドダンスを踊っていたらしい  
「俺マジでクロノスに変身したんだな……」

と言いつつも体は踊り続けていて挙句の果てにはU・S・Aまで踊り始めるとい  
う、控えめに言つてカオスな光景になっていた……

あれから少し経ち平静を取り戻した俺はクロノスの機能を確認かめるべくテストを  
始めた。

「まずはポーズから確認するか」

クロナス最大の特種能力、それは時間を停止・再始動させる『ポーズ&リスタート』という能力だ。正確にはバグルドライバーIIにある2つのボタンを押すと、胸部にある特種装置『サンクシオンズエフェクター』内の制御システムである『タイムエグゼキューター』の機能が働き、自身のゲームエリア内の時間の流れを制御し、『仮面ライダークロニクル』のゲームエリア内の時間を停止させるという仕組みらしい。結構、ややこしいな。

「まあ試してみますか」

そう言って俺はバグルドライバーIIにある2つのボタンを押した

ポーズ

と音声が届くと、風に揺らんでいた木々や花、空を飛んでいる鳥、街中を走る車や人など自分以外の全てが停止していた。だが、

リスタート

すぐに再始動してしまった。どうやら、クロノスの力に制限がかかっているらしく停止できる時間がかなり短くなっているみたいだ。

だが、少なくとも実際に時間が止まることは確認できたのでよしとしよう。

「俺としてはもつと検証したいが、一夏達もシヨツピングモールから帰ってくる時間帯だしそろそろ帰るか」

俺はクロノスの変身を解除し、檀黎斗から託されたカバンにしまいながら家路についた



「おお!! ついに変身したか。ふむ、中々様になっておるの」

達也の変身を満足そうに眺めていた神であったが

「それに面白いものも見れたし、今度からかつてみるかの。フオフオフオwww」

バツチリ例の再現シーン（黒歴史）を録画していた神は達也が恥ずかしのあまり苦しみ悶える姿を思い浮かべながら、某顔面土砂崩れサーヴァントみたい顔で笑っていたそう。